

第一章 沿革通史

・旭工十年間のあゆみ

・寄稿

・回想

・各科のあゆみ

全日制課程 この十年間の沿革概要

創立からの八十年間

昭和十六年、応用化学科、建築科、土木科の三学科を設置した北海道庁立旭川工業学校が設立された。昭和二十三年、学制改革により北海道立旭川工業高等学校と改称、定時制課程が発足し建築科、土木科の二学科が設置された。昭和二十五年、現在の校名である北海道旭川工業高等学校と改称された。

学科編成は、昭和二十六年に電気科、昭和三十一年に機械科、昭和三十三年に自動車科、昭和三十六年に電子工業科、定時制課程電気科を設置、昭和三十八年に電子工業科は電子科と改称、平成三年に土木科は一学級に削減、平成六年に機械科は電子機械科、平成十年に電子科は情報技術科に転換、平成十三年に電子機械科は一学級に削減、平成二十六年に定時制課程建築科、土木科を建築・土木科に統合、令和二年に自動車科は閉科となった。現在、全日制課程は、工業化学科、建築科、土木科、電気科、情報技術科、電子機械科の六学科、十八学級、定時制課程は、電気科、建築・土木科の二学科、八学級である。

校舎は、昭和五十七年に、一条通り校舎（現在、旭川東警察署）から現在の校舎に移転した。

令和から六学科に

平成二十三年度に創立七十周年を迎えて以降、本校における重要な出来事として、元号が平成から令和へと変換した令和元年度の令和二年三月をもって、自動車科が閉科したことがある。

北海道教育委員会は、旭川市の中学卒業予定者の減少に伴い、本校において七学科の維持が困難と判断

し、自動車科は、工業高等学校の主要基幹六学科に含まれていないため、平成三十年度から入学者の募集を停止した。

自動車科は、昭和三十三年、車輛の急増に応え、将来車輛産業に活躍する技術者の育成のため、道立工業高等学校として初めて本校に設置された。「自動車科充実期成会」を組織し、関係機関から資金援助を受け、実習教材や施設設備を充実させていった。昭和三十五年、自動車分解整備事業の認証、昭和四十一年、自動車整備士二種養成施設に指定、平成十九年から、高校生ものづくりコンテスト自動車整備部門全国大会に五回、平成二十一年から、若年者ものづくり競技（全国）大会自動車整備職種に二回出場した。平成三十年、課題研究でレストアした実習車両を、同窓会の支援により札幌モーターショーに出展した。

六十二年に渡り二千三百名余りの卒業生を輩出した。旭川市はもとより、全道、全国、さらには海外の自動車関連産業において活躍している。日産自動車に就職し、平成二十三年、技能五輪国際（英ロンドン）大会自動車工職種において、金メダルを獲得した卒業生もいる。また、入学出願者は毎年定員を満たしていたなど、多方面から惜しまれた閉科であった。現在は電子機械科において、自動車関連の学習を取り入れている。

前代未聞の災害に負けず

平成三十年九月六日三時頃、北海道胆振東部において最大震度七の地震が発生し、日本初の北海道エリア全域に及ぶ大規模停電「ブラックアウト」が発生した。旭川では震度四を記録し、市内全域が停電となったが、翌日の夕方には市内全域の停電が復旧した。

本校は、旭川医大病院が近くにあるため停電は朝方からすぐに復旧したが、学校から少し離れると信号機

は停止していた。食料や電源、燃料などを確保して生活を安定させることを優先し、二日間臨時休業とした。当日、インターネットを予定していた学科は中止したが、電話での連絡ができなかったため、会社等に直接訪問した。週休日を挟み、九月十日からは現場見学、避難訓練を実施するなど通常の教育活動を再開できた。このことをきっかけに、ライフラインとしての電気的重要性を再認識し、関連の進路を希望する生徒の意識が高まった。

令和二年一月、新型コロナウイルス感染症の第一例目が日本で初めて検知された。道は二月二十八日に緊急事態宣言を発出し、週末の外出自粛、学校の臨時休業等の要請があった。そのため、三月一日（日）に予定していた卒業式を三月二日（月）に延期し、卒業生だけで実施した。三月十六日から二学科ごとに分散登校を実施した。

令和二年四月八日から通常どおりに始業したが、国が緊急事態宣言を全都道府県に発出したため、四月二十日から臨時休業した。さらに緊急事態宣言が延長されたため、五月十八日から、学級を出席番号の奇数と偶数で二分して分散登校を実施した。文部科学省から五月に学校における新型コロナウイルス感染症に関する衛生管理マニュアル「学校の新しい生活様式」が発出され、これを参考に学校において感染症対策に努めていった。授業時数を確保するため夏季休業日を短くし七月末日まで登校日とした。高体連の北海道大会は中止となり上川地区で代替大会を開催、就職採用選考期日が一月延期となった。工高祭は中止、見学旅行は、日程を二回延期し見学先を変更、日程を一日短くして令和三年三月に実施した。ほかにも様々な教育活動が多大な影響を受けた。

令和三年五月七日に国が新設したまん延防止等重

点措置を道に開始し、後日、緊急事態措置を開始したため、分散登校を実施した。オンラインで授業を行い、家庭でも登校した生徒と同じ授業を受けられるようにした。当初は、目の前にいる生徒とモニター越しの生徒の両方への対応、カメラに映る教材等の範囲や大きさを把握しなければならぬなどの課題もあった。令和二年度に中止した工高祭は、三密を避けた内容とし生徒たちだけで、工高コンと名前を変えて実施した。これからも国や道の措置に応じながら、感染症対策を徹底し新型コロナウイルスと共存・共生して、様々な教育活動を工夫しながらできる限り実施していく。

部活動が強い旭工

この十年間においても、これまで通り「旭工は部活動が強い」という評判を地域から得ている。

運動系は、スキー部、硬式テニス部、空手道同好会が活動を止め、十三の部が活動してきた。地区大会には、十二の部が出場した。十回すべてに出場したのは、ソフトテニス部、陸上部、バスケットボール部、バドミントン部、柔道部と、五部もある。さらに全国大会には五部が出場した。陸上部は三回、平成二十四年度全国高等学校総合体育大会の走高跳に二名、同大会平成二十五年度の走高跳、同大会平成二十六年度の八種競技、野球部が平成二十四年度全国高等学校野球選手権（甲子園）大会、バドミントン部が平成二十四年度全国高等学校総合体育大会のダブルス、ソフトテニス部が平成二十五年度全国高等学校総合体育大会の個人戦、ラグビー部が平成二十八年全国高等学校ラグビーフットボール（花園）大会、ボクシング部は平成二十七年からこれまで令和二年度の大会中止を挟み六回連続、全国高等学校総合体育大会に五回、国民体育大会に四回、全国高等学校ボクシング選抜大会

に四回、出場した。

文化系は、十一部・局・同好会が活動してきた。

地区大会には五部が出場し四部が全道大会に出場した。十回すべてに出場したのは、美術部、放送局。全国大会には、情報処理部が全国高校生プログラミングコンテストに六回入賞、新聞局が全国高校新聞年間紙面審査に五回、全国高校新聞コンクールに四回、放送局がNHK杯全国高校放送コンテストに四回、出場した。

工業クラブは、高校生ものづくりコンテスト全国大会に、電気科三回、自動車科三回、建築科二回、工業化学科、土木科、若年者ものづくり競技大会に、情報技術科は平成二十五年度から令和二年度の中止を挟んで八回連続、工業化学科、建築科、電気科、自動車科、高等学校ロボット相撲選手権に三回、ジャパンマイコンカーラリー全国大会に四回、全国高等学校ロボット競技大会に七回、出場した。

運動系、文化系、工業系と全ての活動において、多くの生徒が好成績を収め活躍し成長していることが、本校の強みである。

これからの旭工

平成二十五年度入学生から年次進行により高等学校学習指導要領が、段階的に実施した。知識基盤社会の時代において、生きる力を育成するための教育課程を編成し実践してきた。

文部科学省から工業科の教育が評価され、平成二十五年から平成二十八年まで、全国で十一校、道内では二校が文部科学省の委託事業を受けた。本校は、優秀だった卒業生をモデルに、見えない学力等を総合的に評価し、資質・能力の向上を図るための調査研究を行い、旭工版ルーブリックを作成した。

高等学校は、令和四年度入学生から年次進行で新学習指導要領が実施されている。これからの教育は、全ての子供たちの可能性を引き出し、個別最適な学びと協働的な学びを実現する令和の日本型学校教育の構築を目指し、新学習指導要領を着実に実施することが重要であり、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力、人間性の涵養等の育成が求められている。これらの資質・能力を育成するには、ものづくりを基盤とする工業教育、さらに部活動等も充実している本校が適している。

令和五年度高等学校入学者選抜から推薦入学者選抜は自己推薦となる。本校の入学者の受け入れに関する方針「アドミッション・ポリシー」は、各学科への興味・関心及び学習意欲のある生徒、自己実現に意欲的に取り組み、仲間と協働しながら目標の達成に努力する生徒、生徒会活動・部活動・ボランティア活動等に興味があり、社会に貢献する意思のある生徒である。

本校は、令和二年度入学生から三年連続で定員割れしている。令和四年度の学校改善項目の一つを入学受検者を増やすとし、取組方法を学校全体で協議し進めている。本校の特色は、八十周年を迎えた伝統校、全道一学科数が多い工業高校、充実した就職先・進学先、教職員が多い、教育相談部があるなど生徒を見守る環境の充実等である。これらを十分にピーアールし、さらに受検者が増えるよう魅力ある学校づくりを推進していく。

本校は、「旭工」（きょつこう）と呼ばれ、地域から親しまれてきた。北北海道の工業教育の拠点校として、地域や企業の期待に応え、新たな社会を拓き未来を担う人の育成により一層尽力し、「旭工ブランド」を高めていく。

全日制課程 この十年間のあゆみ

平成二十四年度

7月20日 高等学校野球選手権大会 北北海道大会優勝（対遠軽高校2…1）

第94回全国高等学校野球選手権大会（甲子園大会）出場校に決定

第94回全国高等学校野球選手権大会（甲子園大会）1回戦、龍谷大

平安高校に8…9で惜敗

3月31日 第22代校長 川崎博正氏 定年退職

平成二十五年度

4月1日 第23代校長 岡本義則氏 発令（北海道稚内商工高等学校校長）

平成二十六年

4月1日 定時制課程建築科、土木科の2科を建築・土木科1科に統合

平成二十七年

3月31日 第23代校長 岡本義則氏 定年退職

平成二十八年度

4月1日 第24代校長 小幡圭二氏 発令（おといねっふ美術工芸高等学校校長）

平成二十九年度

9月24日 北海道高等学校ラグビーフットボール南・北選手権大会優勝（対北見北斗高校47…40）

第92回全国高等学校ラグビーフットボール大会（花園大会）出場校に決定

第92回全国高等学校ラグビーフットボール大会（花園大会）1回戦、高鍋高校に5…69で敗退

2月27日 校舎棟等大規模改造工事完成

平成三十一年度・令和元年度

2月27日 校舎棟等大規模改造第2期工事完成

平成三十年度

4月1日 第25代校長 太田潤一氏 発令（北海道小樽工業高等学校校長）

令和二年度

4月1日 第26代校長 諸橋宏明氏 発令（北海道教育庁学校教育局高校教育課主幹）

3月31日 教育情報通信ネットワーク環境整備工事完成

令和三年度

1月7日 電子計算組織システム設置（情報技術科）

2月18日 高速液体クロマトグラフィシステム設置（工業化学科）

2月25日 ICP発光分光分析装置設置（工業化学科）

3月18日 デジタル化対応旋盤設置3台（電子機械科）

3月22日 CADシステム設置（電子機械科）

3月24日 マシニングセンタ設置（電子機械科）

3月28日 シーケンス制御実習装置設置（電気科）

令和四年度

4月1日 第27代校長 稲津誠氏 発令（北海道帯広工業高等学校校長）

令和五年度

4月1日 第28代校長 稲津誠氏 発令（北海道帯広工業高等学校校長）

令和六年度

4月1日 第29代校長 稲津誠氏 発令（北海道帯広工業高等学校校長）

令和七年度

4月1日 第30代校長 稲津誠氏 発令（北海道帯広工業高等学校校長）

令和八年度

4月1日 第31代校長 稲津誠氏 発令（北海道帯広工業高等学校校長）

令和九年度

4月1日 第32代校長 稲津誠氏 発令（北海道帯広工業高等学校校長）

令和十年度

4月1日 第33代校長 稲津誠氏 発令（北海道帯広工業高等学校校長）

令和十一年度

4月1日 第34代校長 稲津誠氏 発令（北海道帯広工業高等学校校長）

令和十二年

4月1日 第35代校長 稲津誠氏 発令（北海道帯広工業高等学校校長）

定時制課程 この十年間のあゆみ

平成二十四年度

4月9日 平成二十四年度入学式を挙行

電気科14名 建築科11名

土木科10名 合計35名

5月18日 生徒総会

6月2日 定体連地区大会

6月16日 定体連全道大会

7月4日 食の感謝祭

7月9日 夏季球技大会

7月13日 工高祭（二日間）

7月25日 映画鑑賞

9月7日 生活体験発表大会

10月11日 修学指導（一泊二日）

10月23日 見学旅行（四泊五日）

11月15日 秋季球技大会

12月13日 立会演説会・投票

1月31日 送別ボウリング大会

2月8日 冬季球技大会

3月1日 第六十五回卒業式を挙行

電気科13名 建築科10名

土木科3名 合計26名

3月5日 入学者選抜検査（面接）

平成二十五年度

4月8日 平成二十五年度入学式を挙行

電気科10名 建築科12名

土木科5名 合計27名

5月17日 生徒総会

6月1日 定体連地区大会

6月15日 定体連全道大会

7月3日 食の感謝祭

7月8日 夏季球技大会

7月12日 工高祭（二日間）

7月24日 映画鑑賞

9月13日 生活体験発表大会

10月10日 修学指導（一泊二日）

10月28日 見学旅行（四泊五日）

11月14日 秋季球技大会

12月12日 立会演説会・投票

1月31日 送別ボウリング大会

2月12日 冬季球技大会

3月1日 第六十六回卒業式を挙行

電気科16名 建築科9名

土木科1名 合計26名

3月5日 入学者選抜検査（面接）

平成二十六年年度

4月8日 平成二十六年年度入学式を挙行

電気科11名 建築・土木科10名

合計21名

5月16日 生徒総会

5月31日 定体連地区大会

6月14日 定体連全道大会

7月2日 食の感謝祭

7月7日 夏季球技大会

7月11日 工高祭（二日間）

7月24日 映画鑑賞

9月12日 生活体験発表大会

10月9日 修学指導（一泊二日）

10月28日 見学旅行（四泊五日）

11月13日 秋季球技大会

12月11日 立会演説会・投票

1月30日 送別ボウリング大会

2月10日 冬季球技大会

3月1日 第六十七回卒業式を挙行

電気科9名 建築科4名

土木科2名 合計15名

3月4日 入学者選抜検査（面接）

平成二十七年年度

4月8日 平成二十七年年度入学式を挙行

電気科2名 建築・土木科14名

合計16名

5月15日 生徒総会

5月30日 定体連地区大会

6月20日 定体連全道大会

6月24日 食の感謝祭

7月6日 夏季球技大会

7月10日 工高祭（二日間）

7月24日 映画鑑賞

9月11日 生活体験発表大会

10月15日 修学指導（一泊二日）

10月18日 見学旅行（四泊五日）

11月12日 秋季球技大会

12月10日 立会演説会・投票

12月24日	映画鑑賞	12月24日	土木科4名 合計23名	5月18日	電気科8名 建築・土木科16名
1月29日	送別ボウリング大会	3月7日	入学者選抜検査(面接)	5月18日	生徒総会
2月10日	冬季球技大会	4月10日	平成二十九年入学式を挙行	5月26日	定体連地区大会
3月1日	第六十八回卒業式を挙行	4月10日	平成二十九年入学式を挙行	6月16日	定体連全道大会
3月1日	電気科10名 建築科7名	4月10日	平成二十九年入学式を挙行	6月20日	食の感謝祭
3月1日	土木科4名 合計21名	4月10日	平成二十九年入学式を挙行	7月2日	夏季球技大会
3月3日	入学者選抜検査(面接)	5月19日	生徒総会	7月6日	工高祭(二日間)
平成二十八年		5月27日	定体連地区大会	7月24日	映画鑑賞
4月8日	平成二十八年入学式を挙行	6月17日	定体連全道大会	9月14日	生活体験発表大会
4月8日	電気科7名 建築・土木科16名	6月21日	食の感謝祭	10月11日	修学指導(一泊二日)
5月13日	合計23名	7月3日	夏季球技大会	10月23日	見学旅行(三泊四日)
5月13日	生徒総会	7月7日	工高祭(二日間)	11月8日	秋季球技大会
6月4日	定体連地区大会	7月21日	映画鑑賞	12月12日	立会演説会・投票
6月18日	定体連全道大会	9月15日	生活体験発表大会	12月21日	映画鑑賞
6月22日	食の感謝祭	10月12日	修学指導(一泊二日)	1月31日	送別ボウリング大会
7月4日	夏季球技大会	10月24日	見学旅行(四泊五日)	2月8日	冬季球技大会
7月8日	工高祭(二日間)	11月9日	秋季球技大会	3月1日	第七十一回卒業式を挙行
7月22日	映画鑑賞	12月13日	立会演説会・投票	3月5日	入学者選抜検査(面接)
9月9日	生活体験発表大会	12月22日	映画鑑賞	平成三十一年度・令和元年度	
10月6日	修学指導(一泊二日)	2月1日	送別ボウリング大会	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行
10月25日	見学旅行(四泊五日)	2月13日	冬季球技大会	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行
11月10日	秋季球技大会	3月1日	第七十回卒業式を挙行	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行
12月14日	立会演説会・投票	3月1日	第七十回卒業式を挙行	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行
12月22日	映画鑑賞	3月6日	入学者選抜検査(面接)	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行
1月31日	送別ボウリング大会	3月6日	入学者選抜検査(面接)	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行
2月10日	冬季球技大会	3月6日	入学者選抜検査(面接)	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行
3月1日	第六十九回卒業式を挙行	3月6日	入学者選抜検査(面接)	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行
3月1日	電気科11名 建築科8名	3月6日	入学者選抜検査(面接)	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行
平成三十年度		4月9日	平成三十年度入学式を挙行	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行
4月9日	平成三十年度入学式を挙行	4月9日	平成三十年度入学式を挙行	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行
5月17日	生徒総会	5月17日	生徒総会	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行
5月25日	定体連地区大会	5月25日	定体連地区大会	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行
6月15日	定体連全道大会	6月15日	定体連全道大会	4月8日	平成三十一年度入学式を挙行

6月19日	食の感謝祭
7月1日	夏季球技大会
7月5日	工高祭（二日間）
7月23日	映画鑑賞
9月13日	生活体験発表大会
10月10日	修学指導（一泊二日）
10月29日	見学旅行（三泊四日）
11月12日	秋季球技大会
12月11日	立会演説会・投票
12月23日	映画鑑賞
2月3日	送別ボウリング大会
2月12日	冬季球技大会
3月1日	第七十二回卒業式を挙行
3月4日	電気科7名 建築・土木科7名 合計14名 入学者選抜検査（面接）
令和二年度	
4月8日	令和二年度入学式を挙行
	電気科11名 建築・土木科14名 合計25名
5月23日	定体連地区大会（中止）
6月19日	生徒総会
6月13日	定体連全道大会（中止）
7月6日	夏季球技大会（中止）
7月10日	工高祭（中止）
7月22日	映画鑑賞（中止）
9月10日	生活体験発表大会
9月29日	食の感謝祭

10月9日	旭工定時フェス2020
10月27日	見学旅行（三泊四日）
11月10日	秋季球技大会
12月9日	立会演説会・投票
12月23日	映画鑑賞
1月29日	送別ボウリング大会
2月9日	冬季球技大会
3月1日	第七十三回卒業式を挙行
3月3日	電気科7名 建築・土木科4名 合計11名 入学者選抜検査（面接）
令和三年度	
4月8日	令和三年度入学式を挙行
	電気科6名 建築・土木科7名 合計13名
5月14日	生徒総会
5月22日	定体連地区大会
6月9日	食の感謝祭（中止）
6月19日	定体連全道大会
7月5日	夏季球技大会
7月9日	工高祭（中止）
7月21日	映画鑑賞
9月10日	生活体験発表大会
10月19日	見学旅行（三泊四日）
12月8日	立会演説会・投票
2月2日	送別ボウリング大会
3月1日	第七十四回卒業式を挙行
	電気科7名 建築・土木科9名



3月3日	合計16名 入学者選抜検査（面接）
令和四年度	
4月9日	令和四年度入学式を挙行
	電気科8名 建築・土木科6名 合計14名
5月13日	生徒総会
5月28日	定体連地区大会
6月18日	定体連全道大会
7月4日	夏季球技大会
7月8日	工高祭（二日間）
7月20日	食の感謝祭
7月22日	映画鑑賞
9月9日	生活体験発表大会

寄稿

「旭工への思ひ」

第二十三代校長 岡本義則



北海道旭川工業高等学校
創立八十周年、心からお祝
いとお喜びを申し上げます
と共に、これまで旭工の発
展に寄与された多くの関係者の皆様に深く敬
意を表します。

閉校の任を何とか遣り遂げた稚内商工から、
教職のゴールとなる旭工への赴任。学校経営
に専念する決意を新たにしたので今も記憶し
ています。創立八十周年記念誌発刊にあたり、
旭工での思い出を幾つか記述いたします。

全日制では、月一回の全校集会での講話が
あり、「旭工ブランド」と言う造語に生徒の更
なる飛躍を願い、「ものづくり」について語っ
ていました。そんな思いの講話について、生徒・
保護者・教職員の受け止めはどうなのか？青
色LEDを発明した三氏のノーベル賞受賞直
後の全校集会、体育館へ向かう途中、ある教
諭から今日の話は青色LEDですね！と突然
の一言。先生方が講話を気にしていると感じ

ました。別の題材を準備していましたが、急
遽青色LEDに変更したのを記憶しています。
講話のデキはさて置いて、嬉しく感じた出来
事でした。

真面目でおおらかな生徒は、整然と全校集
会に臨み、「金鳥羽搏く大雪山に・・・」と高ら
かに歌う姿が印象的でした。凜とした卒業式
後、卒業生から保護者への謝辞に両者が涙目・
涙声となり、卒業式出席者のもらい泣きを誘
う光景には心を打たれました。

校内人事の件、査定昇給の件、公務補の件、
給食調理員（定）の件、教務規定（定）の件
など山積する課題に、教頭さん・事務長さん
の力を得てあたっていました。特に間口減（全）
については、数年は大丈夫と思っていたところ
に、晴天の霹靂でした。どの学科をとば学
校で決められるはずもなく、後日、自動車科
が対象となりました。その間、同窓会・PTA
の皆様には、要望書の作成・賛同の取り纏め・
陳情など多大なるご支援をいただいたことに、
お礼申し上げます。皆様の旭工への深い愛情
を感じたところです。

全定ともに、工業関係・定通教育関係や高
体連・高文連の当番校を数多く担当しました
が、大会の完成度や参加生徒の態度は、先生
方の高い運営力・指導力のたまものでした。

最後に、私事です

が在任中に人工股関節置換手術を受け、退院後の3学期始業式は、ステージ上の椅子からのスタートでした。杖歩行から杖なし歩行まで三ヶ月程かかり、その間、生徒・保護者・教職員



の温かな対応に感謝しています。
事件・事故もありましたが、円滑な学校運営をめざし、先生方のご協力をいただき、気持ちよく過ごした三年間でした。本校が創立八十周年を節目として、今後も「信頼される人」を輩出し、益々充実発展されますよう心からご祈念申し上げます。



「金鳥羽搏く」が如く

第二十四代校長 小 幡 圭 二



昭和十六年、道北初の工業学校として開校した旭工が、ここに八〇周年の記念すべき年を迎えられること

を、関係の皆様とともに心から喜びたいと思います。また、新たな歴史を築くために頑張る在校生、価値ある歴史と伝統を築かれた卒業生、それを支えてこられた教職員と保護者の皆様、地域の皆様に心から敬意を表します。

美しい大雪山を望みながら学ぶ全道屈指の工業高校である旭工で過ごした二年間は、私にとって、教職生活の中で大変思い出深い時間となりました。

まず頭に浮かぶのは、旭工生の気持ちの良き挨拶で、何よりの自慢でした。特に生徒玄関での生徒たちからの挨拶は、日々の元気の源でした。また、進路実績や数々の資格取得は勿論のこと、文武両道のもと運動系文化系ともに部活動が盛んで全道・全国大会やものづくり競技で活躍する旭工生を大変誇らしく思っていました。赴任した年に初出場を果たしたラグビー花園大会では、一回戦突破は成

りませんでした。最後まで諦めずに初トライを決めた瞬間の感動を今でも覚えています。

そして、先生方の熱心な姿を忘れることができません。旭工生の数々の成果や実績、卒業の時に確信する逞しい成長は、寸暇を惜しんで生徒たちのために頑張る先生方の日々の指導の積み重ねによるものでした。

また、工高祭で「夏色」を歌い大いに受けたこと、旭工オリンピックの対抗リレーでバトンゾーンに入らず幻のアンカーになったこと、年度末の体育文化大会でバスケットボール教員チームに出場しアキレス腱を切ってしまったことなど、思い出は数え上げればきりがありません。ただ、地域からの要請のもと設置された道立高校唯一の特色ある自動車科の閉科は、整備士を目指して学ぶ生徒たちや卒業後に活躍する同窓生、応援してくださる地域や業界の方々のことを考えると、残念でなりません。

二年間ではありましたが、「ものづくりをとおした人づくり」を実践し優秀な工業人を育て続ける名門、旭工で校長を務めさせていだいたことを生涯の誇りに思っています。

校歌の冒頭にある「金鳥羽搏く」の金鳥は中国に伝わる伝説の鳥で、光り輝く太陽に棲むその鳥が大きく羽を広げて羽ばたく姿は、

未来への飛躍を彷彿させます。八〇年は

ゴールではなく、一〇〇年、そしてその先に向けた新たな一歩です。時代の変化は激しく、先行きが不透明な社会の状況下にあります。旭工に集う朝日子たち

が、校訓「信頼される人になれ」を胸に、時代に流されることなく時代をつくる人として活躍するとともに、先輩が築きあげた歴史と伝統を糧に後輩が新たな歴史を積み上げ、歴史と伝統を誇る名門、北海道旭川工業高等学校が未来に向かって飛躍することを願って止みません。



回想

旭工卒業生から

全日制課程

「旭工の思い出」

平成二十九年 工業化学科卒業 前野 慎



旭工を卒業して早四年。高校の頃を懐かしく感じます。

旭工までは徒歩十分でしたが、バスケット部の朝練で毎朝七時には学校に登校して練習をしていました。バスケットボールは今でも大好きですが、毎朝早起きして練習し、授業を受け、その後また部活と今考えればとても頑張っていたんだと思うと共に、すごく充実した毎日を送っていたと感じます。高校時代は当たり前に感じていたことが、たった四年で大人になったと言えど一言に尽きますが、何事にも一生懸命に頑張る、楽しんでいたあの時が今よりも輝いていると思えました。

高校の頃を振り返ることがあまりなかったため今回このような文を考えていると高校生の頃の思い出が蘇り、久しく会っていない友

人や先生に会いたくなってきました。高校のクラスは個性豊かな人が沢山いて、とても楽しい学校生活を送っていました。あの頃は勉強が好きな訳ではありませんでしたが、学級一位を取るという目標を掲げ、負けず嫌いな性格だったため、テスト前は徹夜して勉強していました。その甲斐あって学級一位を何度か取ることができ、これは今でも僕のひとつの自慢になっています。

課題研究では、「割れないシャボン玉を作る」というものを行いました。その名前の通り、割れないシャボン玉を作る為に材料や配分を試行錯誤していました。最後には手袋の上で何度も割れずに跳ねるシャボン玉を作ることになりました。課題研究の時間は、何度もシャボン玉を作り、割れないか確かめるだけなので、ほとんどが遊びのようなものでとても楽しかった記憶があります。

高校三年間は楽しいことばかりで、思い出せば笑い話が絶えません。私にとって、人間としても成長できたかけがえのない時間でした。

今年の四月より工業化学科の教員として生徒の前に立ちます。旭工で学んだことを伝えていきたいと思います。

「旭工の思い出」

平成二十九年 建築科卒業 加藤 学 希



私は高校時代、陸上競技部に所属していました。練習は中学時代とは比べ物にならないほど厳しく辛かったです。

ですが、なんとか耐えながら先輩達を追いかけて、部長に選ばれた後、インターハイにも出場することができました。しかし良いことばかりでもなく、二年生の夏に気が緩んでしまっていたのか頭髪について顧問の先生にかなり厳しく注意されてしまいます。部長だったこともあり一時は練習に参加できないことがありました。当時はかなりへこみ、退部まで考えましたが、友人や先輩に諭され、坊主になって復帰したことは今では笑い話です。三年生の頃はより練習に励むようになり、まだ誰もいない学校のグラウンドで朝練を行ったり夜遅くまで練習していたせいで、疲れ果てて眠気に襲われながら授業を受けていた記憶があります。

陸上競技は個人競技なのですが高体連では個人の順位に応じて学校に点数が入り、その点数の総得点により学校の順位が決まります。旭工は長い間地区優勝には至っていません

のですが、私が三年生の時みんなの努力のおかげで何十年かぶりの優勝を果たしました。個人競技とはいえ団体戦のようであり、その達成感は今でも忘れられないです。

部活のほかにクラスとしての思い出もあります。学祭では放課後遅くまでお化け屋敷を作ったり、ステージ発表のダンスを放課後の教室や休みの日などに集まって練習していました。二年生の時は優勝し、三年生の時は惜しくも二位でしたが、部活同様みんなで何かを達成した出来事は深く心に刻まれています。

高校生活を通じて出会った仲間たちとは互いに、結婚したり子供ができた今でも連絡を取り合い、家族同士の交流があります。在校生の皆さんにもそういった仲間ができる経験をして悔いのない高校生活を送ってほしいと思います。

「TAKES LIFE」

平成二十三年度 土木科卒業 坂下 初



旭工を卒業して、旭川を離れ十年が経ち、再びこの地に戻ってきました。十年の年月は長いようで短かつ

たように感じます。先日、土木科の先生方に用事があり、来校しましたが、実家から旭工までの道のりをあえて通り、風景に変化が無いか探しました。変わりませんでしたね。三年間通った内の記憶ある一日を思い出しても、あの日と変わらない風景で嬉しいような、寂しいような不思議な気持ちになりました。と、一つ書いてみましたが、どうにも思い出があまりすぎて書ききれないので少しだけ書かせて頂きます。

入学当時、ある先生がこう言いました。「君達はなぜ土木科なの？なぜここにいるの？なぜ働くの？」先生からの純粋な質問とあっていました。怖いですがね。今思い返せばいいじわるで答えが出せない質問をしてきたのです。ですが先生はその後にヒントを言ってくれました。「物事は理屈で覚える。」「なぜ道路や橋は必要なの？なぜ港や空港を造ったの？水や電気はどうやって君達の家に届くの？」と。当時の自分ではこの質問の意味を理解すら出来なかったです。その答えを見つけるため、3年間土木科で学んだ結果、土木とは私達が生活するうえで必要な土台なのだと理解する事ができました。また、自分も土木で社会の役に立てるような仕事がしたいと思うきっかけとなりました。

現在、私は土木に携わる企業に勤めています。授業で教わった事も多々活用しています。それでも毎日新しく学ぶことがあり、脳に汗をかきながら日々を送っています。

土木に携わる仕事は大変ですが、社会のため、自分達の未来のためにこれからも愚直に進んでいきたいです。今後も土木科で学んできた事、思い出を忘れずにいます。ありがとうございました。

「校訓から私が学んだこと」

平成二十五年 電気科卒業 蛇川 貴紀



「信頼される人になれ」この旭川工業高校の校訓は、私の心と記憶にしっかりと刻まれています。そして

今でも、信頼されるとは何かを考えます。高校生時代、生徒会長という貴重な経験をさせていただきました。生徒会長として、各種行事での挨拶や、他校との交流イベントへの参加など、たくさんの先生方にご指導・ご協力をいただき、学ぶことができました。中でも、学校祭の企画・運営は生徒会が一体となって活動しなければならぬことに、大変苦慮し

た思い出があります。しかし、そんな苦しい思い出を良い思い出へと変えてくれるものは、学校祭が大きなトラブルなく終えられたことです。当時の一人でも多くの生徒の思い出に残るイベントができていたら幸いです。

そんな貴重な経験の機会を私に与えてくれたのは、担任の先生の一言でした。何気なく会話していた時に「生徒会やってみたら」と伝えられたのがきっかけです。もともと興味がなかったわけではありませんが、あの一言がなければ実際に行動へは移せていなかったと思います。当時はどんな思いで言葉をかけてくれたかわかりませんが、せっかく声をかけてくれたからには、全力で取り組みたいと決心しました。あの時の一言が今の私へ繋がっています。本当にありがとうございます。

今の私にとっての信頼されるとは、相手から向けられる思いに気づき、応え続けることです。思いの伝え方や、伝えられるタイミングは様々ですが、その思いに真摯に向き合い自分なりの応えを示し続け、一つひとつ積み重ねていくことが信頼されることへ繋がると考えます。まだまだこれからも信頼されるのは何かを考えながら過ごし、今の答えが一番の正解と過信せず、今後さらに得られるもの

があると信じています。

今回この原稿作成をきっかけに、高校生時代を思いだし懐かしむ時間を過ごすことができました。目まぐるしく変化する時代に、かけがえなく変わらない、素敵な高校生活の思い出が、心休まる拠り所となりました。

最後になりますが、旭川工業高校の益々のご発展とこれからの卒業生のご活躍をご祈念申し上げます、本原稿を寄稿いたします。

「幻の給食」

平成二十五年 情報技術科卒業 石橋 優一



この度は、北海道旭川工業高等学校創立八十周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。私が入

学した年は旭工創立七十周年でした。そして、卒業してから八年後のいま、八十周年の記念誌に携わることができ嬉しく思います。

在学時代を振り返ってみると、様々な思い出がよみがえります。毎朝、学ランを身にまとい、たくさんの教科書と部活道具、弁当箱を詰めた重たいラケットバックを背負って、暑い日も強風の日も長い坂道を自転車で駆け

登り通学していたことです。車移動に慣れてしまった今では、あの苦行の日々を繰り返すことはできないでしょう（汗）。見学旅行では先生の提案で、岡山県の児島ジーンズストリートでショップを巡り、香川県では本場のうどんを堪能し、金比羅山に登り、空き時間に全力で缶蹴りをしたりと、定番のルートとは少し違った所でしたが、すごく楽しかったことを覚えています。その他にも、学校祭では二年連続で揚げタコ焼きの出店を開いたり、旭工オリピックでは各競技に一喜一憂して盛り上がりしました。また、留学生を迎え入れ外国の文化を学び、知る限りの英単語を駆使してコミュニケーションを図ったりと、貴重な学校生活を送ることができました。唯一の心残りとして、いつも部活終わりに美味しそうな匂いで誘惑してきた、定時制の給食を食べてみたかったです。

卒業アルバムを振り返ってみると、学校指定のジャージ姿が印象的でした。学年毎に色が違い、私の代は上下水色のジャージでした。後にも先にもあのカラーリングを人前で着ることはないでしょう（苦笑）。

入学当初から、学校生活や将来について考える機会をいただき、親身になってご指導くださった櫻井先生方のおかげで、とても充実

した楽しい三年間でした。

結びに、北海道旭川工業高等学校の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

「父と高校生活」

令和元年度 電子機械科卒業 黒川 陽 海



旭川工業高校に入学してすぐ、私は驚くことになった。私は入学後、友達ができるか、勉強についていけるかなど不安でいっぱいだった。そこで教師である父に高校はどんなところか、勉強は難しいかなど入念に聞き、準備をした。しかし、

すぐにそれらの不安どころではなくなる出来事が起こった。それは着任式のこと、新任の先生がステージに上がっていくなかに父にそっくりな人がいた。父がこの高校にきた？ そう思ったが父に入念に聞いていた時にはそんな話は一切なかったため、「世界には同じ顔の人が三人いると言われていた。その一人がここにいたか」そう思った。私は、ここまで顔が似ているなら声はどうなのだろう、何が好きなのだろう、ワクワクしながら待っていた。

た。しかし私は自己紹介を聞き、今までの人生一、驚いた。そう、そこにいたのは父本人だった。後に父は、「黙っていた方が面白そう」と供述していた。その瞬間から私は誰にもばれないように高校生活を過ごそうと決意した。もしばれたら、友達や先生から距離を置かれてしまうのではと考えたからだ。しかし、その決意もつかの間、帰りのホームルームで担任の先生が放った一言。「この中に親がこの学校の先生のいるか？」ホームルーム後、一人で報告に行こうという計画は散り去り、一瞬でクラス全員に知れ渡ることになった。私の高校生活は開始と同時にいきなりクライマックスを迎えた。そう思った。しかし、次の日からはクラスの人が父の話題で話しかけてくれ、先生方も気さくに話しかけてくださり、心配していたようなことは全く起きなかった。むしろ、父の話題で話す機会が増えたほどだった。波乱の始まりかに思えた私の高校生活は、その後友達と先生方のおかげで楽しく、資格取得もでき、あつという間の高校生活だった。私は今、先生方のご指導のおかげと努力で北見工業大学に進学し、新型コロナの流行で制限はあるものの大学でこれからの自分を探し、頑張っている。この場をお借りして、改めて先生方に感謝を伝えたい。担任

をしてくださった堂腰先生、電子機械科の先生方、進路指導をしてくださった宮崎先生、その他私を育ててくださった旭工の先生方、本当にありがとうございました。

旧職員から

全日制課程

「旭工の思い出」

平成二十八年三月退職 庄 司 淳



昭和六三年四月に工業化学科に赴任し、退職までの二九年間を旭工でお世話になりました。少し見ない間に校舎周辺が賑やかになり、記憶に残っている旭工がだんだん遠くなってゆく感じがします。

十年前の七十周年記念は簡素に行われたと記憶しています。六十周年記念のときは、総務部の関係で校内事務局として係りました。慣れないことで忙しい思いをしました。旭工を支える組織の大きさに驚かされました。教務室で三年、進路指導室で二年、科を離れて仕事をしました。多くの先生方と接し、多くの協力をいただきいい経験となりました。

担任としての思い出は、良いことも、辛いことも今、振り返れば懐かしいものです。

昭和の終わりから平成初めは、バブル景気で求人が殺到したころでした。すぐにバブルは崩壊し、銀行や証券会社など多くの会社が

倒産。長い平成不況が続き、就職氷河期で就職開拓に苦労するなど、両極端を経験しました。生徒が次々と就職試験に落ちてきたときは焦りましたが、めげずに頑張る生徒の姿に逆に励まされ、乗り切ることが出来ました。いつの時でも、全員が決まるまでのあの緊張感は忘れられません。

平成二十一年は新型インフルエンザが夏ころから流行りはじめ、見学旅行をどうするかで苦労しました。出発前の学年閉鎖が効いたのか、ぎりぎりの対応でなんとか実施出来ました。旭川に戻るやすぐに感染の報告を聞いたときは間一髪、冷やとしたものです。しかし今のコロナウイルスの方がはるかに厳しい。

平成二十三年三月の東北大震災は、教室から「ワーツ」と生徒の驚きの声が聞こえるほどの揺れだったと思います。被災地で亡くなった子どもたちや故郷を追われた生徒を思うと、卒業生を出しほつとしていた気分が一転してしまいました。

最後の担任は、科には随分と心配かけましたが、初めて卒業生四〇名を送ることができ、最高の贈り物となりました。「今日は全員揃うかな」と、毎朝、教室の窓から生徒が登校して来るのを見ていたり、毎日の生徒とのふれ

あいな懐かしく忘れられません。長い教員生活のほとんどを旭工で過ごさせてもらいました。改めて感謝するとともに、旭工の益々の発展を祈ります。

「旭工四十四年間の思い出」

平成二十四年三月退職 小 野 和 幸



昭和四十三年に建築科勤務、平成二十四年退職まで四十四年間長きに渡り旭工建築科にお世話になりました。

旭工生、先輩、恩師教職員に支えられ頑張つてこれました。特に建築科の先生方の生徒に対する中堅技術者を育てる意気込みに感銘していました。全道一の資質の高い生徒、輝いている先生方、外に目を向けると同窓会先輩達の旭工に対する情熱、愛情を感じました。私もいつか同窓会の一員として後輩に誇れる信頼される人を目指し頑張ろうと決意を新たにしました。古い校舎では迷路・旭工山脈とか、割れた四分板ガラスから野良犬がだるまストーブで温まっているのを宿直の時に見たこと、思い出の強い旧校舎を後にし、昭和五十七年六月に待望の新校舎への移転、また、そ

の年旭工が四十周年を迎える年、時代がどんな変化し中堅技術者を育てる意気込みが膨らんでいました。今考えますと昭和の元号が

終わる前には大変な就職難になり、ここから就職活動が始まり、約三十年もの長きに渡り企業訪問、開拓と事業者との信頼関係を作り上げるのが大変でした。おかげさまでいい方向に進み現在にいたっていると思います。すぐに五十周年を迎える年に旭工野球部初の甲子園出場が決まって大変嬉しい悲鳴を上げたものです。その後も何回か甲子園出場を果たし、いずれも事務局として甲子園にも行かさせてもらい、携われたことはいいい思い出になりました。本当に感謝、感謝です。平成十六年には専門学校における「日本版デュアルシステム」を旭工で実施、三年間の文部科学省で、十五都道府県十五地域をモデル地域とし指定され、そこに係わらせてもらったことは大変名誉なことでした。勉強になりました。その中で約十年間PTA担当として活動させてもらい学校とPTAとの架け橋になれたことは、大変自分として成長させて頂いたことでもありました。

これから創立八十周年の成功に向けて同窓会・PTA・学校と力を合わせ頑張っていきます。

これからの旭工の益々のご発展を祈念申し上げます。

「旭工で過ごした充実の十年間」

平成十四年三月転出 白 野 勝 義



♪ 金鳥羽搏く

大雪山に♪

春の晴れた日、残雪の大雪山連峰を見るたびに、旭

工校歌の光景を幾度となく感じました。

平成四年四月に留萌工業高校から着任して、旭工に十年間お世話になりました。部活動顧問はバレーボール部です。私が赴任する一年前には春高バレー決勝に出た強豪チームです。旭工の部活動は今でもとても盛んで、多くの部が全国大会に出場していました。その中でも全国大会常連のバスケットボール部、バドミントン部とともに、体育館で練習できたことはとても刺激的でした。

特に夏、インターハイ出場のバドミントン部との練習時は、暑さ対策で窓を閉め切り、ジェットヒーターをつけての練習だったことを思い出します。暑かった。冬は体育館に暖房設備が設置されるまではジェットヒーター

で暖をとっていたので、午前の部活動は寒かった記憶があります。

土木の授業では、神楽岡公園での測量実習が思い出されます。学校から測量機器を担いで移動します。はじめは、私も歩いて神楽岡公園まで移動しましたが、一年間も持たなかったと思います。

実習での思い出もたくさんありますが、実習中にあった事件を紹介します。

一つ目は、末永遥さん、浅野ゆう子さん出演の氷点のロケです。午前中からざわついていたので、どうしたか尋ねると、ロケがあるということでした。そのロケの様子を実習中に生徒と遠巻きで見っていたことを思い出します。浅野さんには女優オーラを感じました。

二つ目は、駐車場で練炭自殺です。事が事だけに多くは書きません。昼休みに生徒が血相を変えて叫びながらこのことを教えてくれました。すぐ警察に連絡しました。午後からは現場検証を見ていて、実習になりませんでした。

旭工はもう一度勤めたいと思っていた学校ですが、希望が叶いませんでした。残念です。終わりに、旭工創立八十周年をお祝いするとともに、益々のご発展を祈念いたします。

「旭工の思い出」

平成三十一年三月退職

穴戸 良文



北海道旭川工業高等学校
創立八十周年おめでとうござい
ます。心よりお祝い申
し上げます。

八十周年と言えば人間の一生に等しい年月、人生と同じく幾多の変遷の中で、生徒・保護者・学校及び同窓会や地域社会の人たちの努力の積み重ねが現在の限らない発展につながっていると思います。先輩諸氏のご努力に心から感謝するとともに、旭工の益々の発展を心から願っています。

さて、私が旭工電気科に赴任したのは、平成十五年四月のことでした。電気科職員室の窓から見渡せる十勝岳連峰の絶景に、いつも心を癒やされたことを今でも思い出します。平成三十一年三月に定年退職するまでの十六年間、思い出はあまりに多くその密度はあまりに濃いものでした。

主に総務部を担当し、思い出に残る大きな行事や紙面には載せられない出来事は良くも悪くも私にとって貴重な経験となりました。

一つは、創立七十周年記念に向けた協賛会事務局としての取り組みです。七十周年の三

年前から同窓会・PTA・学校の三者で協賛会を立ち上げ、学校林の整備事業や同窓会館改修工事を計画通り行うことが出来ましたが、最後の式典を縮小し挙行しなければならなかったことが残念でなりません。早いものであれから十年がたち、今回の八十周年が二十年分の思いを込めた式典となる事を心から願っています。

もう一つは、平成二十五年の野球部が夏の甲子園に出場し、その事務局を担当したときの思い出です。この年の北海道大会は帯広開催でしたが、決勝戦を急遽全校応援することとなり、全校生徒での長時間のバス移動にも負けず、球場では旭工独特の低音で地響きのような応援が今も耳に残っています。結果、優勝の瞬間を全員で最高の喜びを分かち合う事ができました。

喜びが覚める暇もなく、甲子園出場の準備で大忙しの夏休みでしたが、応援団に帯同し甲子園のアルプススタンドで疲れも忘れて応援していたら、全てが報われた気持ちになった事を、今でも思い出します。

最後に総務部担当として、歴代のPTA会長を初め多くのPTA役員の皆様のご指導・ご支援を頂いたことは忘れることが出来ません。私のその後の教育活動に大きな力となり

ました。本当に有り難うございました。

旭川工業高校がさらに九十周年、一〇〇周年と永久に栄えんことをお祈りしています。

「旭川工業高校での思い出」

令和二年三月退職

下村 幸広



令和二年3月31日をもって31年間の教師生活を早期退職という形でピリオドを打ちました。

旭工には13年間情報技術科教員としてお世話になり、その間先生方やPTAそして素晴らしい生徒たちに囲まれ、充実した大変有意義な教師生活を送らせて頂きました。退職とコロナウィルス蔓延が重なり満足なご挨拶もできず、この場を借りあらためて感謝申し上げます。旭工への勤務は三校目ということもあり、今までの経験を活かし旭工をどの学校にも負けない魅力あふれる学校にしようと張り切っていた日々を思い出します。最初に知り組んだ仕事はインターネットドメインを取得し、独自サイトの構築、独自のメールアドレスの運用でした。これは技術を教える学校として必ずや他校と違うことが認識され、一

目置かれる存在になると考えていました。

また、赴任初年度より「高校生ものづくりコンテスト」の指導担当となり、未経験ながら全国優勝という身の丈に合わない目標を掲げ、生徒とともに日夜奮闘していた事を思い出します。最高成績は全国準優勝と目標には到達できませんでしたが、多くの貴重な経験を積ませていただきました。

2年目からはクラス担任として、高いレベルの進路を実現させようと生徒一人ひとりに向かい合い、今すべき事を明確化させ、旭工初？の北海道大学合格を実現できたときは生徒と抱き合って喜んだことを思い出します。

部活動に目を移すと陸上部顧問として生徒を指導する機会を頂き、顧問最後に地区大会総合優勝を達成できたのは私の心の一生の宝ものです。3年目より活動実績の無い「情報処理部」に「名前だけ」という話で陸上部との掛け持ち顧問になり、せっかくなのだからと活動開始し、全国高校生プログラミングコンテストで準優勝できたときは大変でしたがやってよかったと心の底から思いました。

他にも思い出は尽きないですが、今の私があるのは間違いなく旭川工業高校で得られた経験に依るところです。

退職した今も技術系の話題を見聞するにつ

け、子どもたちにどう話そうかと考える習慣が抜けません。旭川工業高校に勤務でき本当に良かったと思っています。創立80周年おめでとうございます。旭工の益々の発展を祈念いたします。

「旭工での二十年」

平成二十五年三月退職 飯 森 登



旭工を退職して早九年が経ちました。私が在職したのは平成五年から平成二十五年の二十年間です。赴任

した平成五年は正に、工業高校の学科転換や地方にある併置校の工業科が閉科となり、普通高校になる等、高校の形態が大きく変わる変遷の時代でした。機械科も平成六年に電子機械科に学科転換し、機械と設備のコース制としてスタートする事が決定していました。学科転換やコース制の導入は時代の要請に応じた結果であると認識していましたが、実際に一年間で準備するのは大変な事でした。それは新しい学科に対応する実習室の改築、新しい工作機械、実験装置の選定を短期間でしなければなりませんでした。実習室の改築は

物作りの原点である鑄造、鍛造実習室を何とか残そうと考えましたが、新しい機械等を設置出来なくなるので、無くさざるを得なく、断腸の思いで決断いたしました。一方、新しい工作機械、実験装置を実習で使えるように習熟するのも大変な事でした。私は平成六年に二ヶ月間、東京の須賀工業（株）で設備の研修を受けさせて頂きました。また平成六年の年度末には、多忙な時期にもかかわらず、美唄工業高校で若手の先生中心に、M・C・N・Cの研修を受けさせて頂きました。そして平成六年四月、電子機械科の一年生機械コース六十名、設備コース二十名が入学してきました。コース制について、現在も当時の形が継続されている事は大変感慨深く思います。平成八年には旭工で初めて担任を持ち、夏に野球部が甲子園出場を決め、甲子園まで応援に行った事は良い思い出です。その後、平成十三年に電子機械科が二間口から一間口に削減され、二年前には自動車科が閉科になりました。少子化の問題もありますが、学校の規模が縮小されるのは残念な事であり、旭工は是非現状の六間口を維持してほしいと思います。終わりにコロナ禍で指導される先生方、勉強や部活動に頑張る生徒諸君のますますの活躍を祈念いたします。

我が青春の旭工①

